

創刊110周年記念

# 誇れるふるさと

## 24地区リレー

〈vol.1〉

### 〈上宇部② 課題とキーマン〉

上宇部の地域づくりの特色として、小・中学校と地域との良好な関係が挙げられる。特に中学生は地域行事に積極的に参加している。これは上宇部中の前校長、師井浩二さん（現・宇部鴻城高副校長）の尽力の成果だと、地域づくりに関わる多くの人が口をそろえる。

# 子どもらのUターン、移住期待



中学生が活躍する自治連主催の花火の集い（21年11月、上宇部小）

## 中学生が地域活動に積極参加

師井さんは2014年に着任後、月1回のペースで生徒による地域清掃活動を続けた。荒れていた学校を立て直すため、地域に生徒を信頼してもらったための取り組みだった。今では、生徒会を中心に部活動単位で中学校区（上宇部・琴芝地区）の地域行事に参加するようになった。

その一例が地区自治会連合会（大谷欣士会長）主催で20年に始まった花火の集いだ。コロナ禍で激減した地域交流イベントに「実行部隊」として生徒会が関わり、子ども

たちがより楽しめるよう企画立案にも携わった。大谷会長は「中学生ならではの考え方を企画に採り入れたことで、小学生にも好評だった」と振り返る。一方で、地域づくりの課題は、各団体役員の担い手不足。高齢化が進む中、共働き世帯の多い働き盛りの20～50歳代には、地域団体に役員を担う余裕は無い。古くからの住宅が並ぶ地域は高齢化に加えて空き家も目立ち、若い世代が住む集合住宅の多い地域では自治会加入率が低下。次世代の地域運営を危惧する声は、どの団体からも上がる。そうした中で、大谷会長は地元で育った子ども

たちのUターンに期待する。「地域活動に携わった中学生には、地域のために役立てたという誇りが生まれたと思う。いつたん地元を離れても地域の住みよさや人の温かさを思い出し、上宇部に戻ってほしい」と話す。福祉委員会の藤井芳治会長は、別視点でのアイデアとして、移住の促進を挙げる。「空き家は多いが、古民家に興味を持つ若い世代もいると聞く。市も移住・定住に力を入れており、新たに上宇部に住もうという人を受け入れる体制を地区で整えることが、問題解決の糸口にならないだろうか」と模索している。